

自己との関わりを意識化する古典学習指導の考察

— 大村はまの単元学習指導「古典へのとびら」（昭和三十四年）を中心に —

坂東智子

一 本稿の目的

学習指導要領の改訂により、小学校、中学校、高等学校ともに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設されたことを受けて、古典教育に関する論考や実践報告、授業提案が数多くなされている。平成二十一年に、『月刊国語教育』（東京法令）、『教育科学国語教育』（明治図書）に掲載された古典教育関係の論文および実践だけでも、臨時増刊号を含め四十四編に及ぶ¹⁾。

これらの論考と筆者のこれまでの問題意識をもとに、中学校における古典学習指導の主要な課題を次の三点と考えた。

- ① 学習者を主体的な古典の学び手とすること。
- ② 古典を学ぶ意味や価値を学習者が自ら発見し、古典への認識を変容させ、その過程と成果を言語化させること。

③ 古典の学習指導は、「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」及び、「C読むこと」の言語活動を通して行い、それが、単に言語活動をするにとどまらず、古典に親しむ態度の育成に

繋がること。

三課題ともに、小中高等学校に共通したものであるが、発達段階を考慮すると、中学校では特に、②の言語化による学習者自身と古典の関係性の意識化が重要であると筆者は捉えている。古典と現在の自分とが繋がっていることを学びの中で実感し、それを言語化することは、①の主体的な古典の学びを生み、学習者相互の古典を媒介とした交流を可能にする。そのことによって、学習者個人の古典との交わりを深め、古典に親しむ態度を育てることになる。さらに、学びの中で発見した古典の価値や魅力、古典への認識の変容過程を言語化することは、「書かれたテキスト（古典）を理解する」ことに機能するだけでなく、それを「利用し熟考する²⁾」ことの基礎作業となる。「テキスト（古典）を利用し熟考する」ことは、新学習指導要領の中学第二学年の「古典に表れたものの考え方や見方を現代のそれと比べる」や第三学年の「古典の一節を引用した感想文や手紙、作品を紹介する文章を書く³⁾」を実現へ導くものであろう。

西尾実は、「書くことこそ思考発展の不可欠な条件であるとい
 ってよい。(中略)言語教育においては、書くことの学習が中心
 的意味をもたなくてはならない。主体的真実の表現を主軸とした
 作文と、客観的知識の記録と報告を中軸としたカード式学習ノー
 トを作成しなくてはならない。」と記し、言語生活の向上には作
 文と学習記録を「書く」ことが必要であり、「考える」ことの発
 展に一番役立つのは「書く」ことだと考えている。大村はまの国
 語教室においても学習記録を書きまとめることは、個々の学びの
 成立基盤となっており、古典学習においても、記録するだけでな
 く発表や話し合いの準備のための「書く」活動や、意見文・感想
 文などの自己表現としての「書く」活動を適所で行わせている。

読解のためのリライトや読解後の表現活動は、古典学習でも従
 来から工夫され、実践例も多い。しかし、本稿で考察対象とする
 単元「古典へのとびら」⁽⁵⁾は、単元の導入が「書く」活動によりな
 され、古典との交流のとびらを「書く」活動が開き、古典との繋
 がりを「書く」ことにより深めている稀有な実践事例である。

以上のことから、「古典へのとびら」の学習記録を主な考察対
 象として、学習の過程で「書く」活動がどう働いたか、古典の学
 びの言語化により何が実現されたのかを本稿では探っていく。

二 先行研究と研究仮説

本單元に関する先行研究には、次の三論考がある。

- A. 望月敬幸『中学校における古典指導の研究』（修士論文平
 成五年鳴門教育大学大学院）
- B. 佐々木勝司『中学校における古典指導の研究Ⅰ』（修士論
 文平成六年鳴門教育大学大学院）
- C. 渡辺春美『戦後における中学校古典学習指導の考究』（平
 成十九年溪水社 初出「戦後古典教育実践史の研究（一六）
 —昭和三〇年代の大村はま氏の場合—」（『教育学研究紀
 要』平成十二年中国四国教育学会刊）

論考Aは教材編成について精細な考察を行い、論考Bは主に大
 村はまの指導面から論じている。論考Cは何を学びの対象として
 いるかという観点から単元の構造を考察し、四層の構造による単
 元展開は「望まれる古典教育の授業方法を示唆するものといえる」
 とする。三論考は何れも「教科書教材を用いながら、充実した言
 語活動の場を設定し、古典に親しませるとともに、言語能力を育
 成するものであった」と本單元を評価する。

これらの知見に学び、本稿では、単元の導入教材である「物語
 の中の少女」学習の「書く」活動に焦点を絞って、次の仮説のも
 とに考察を行う。

大村はまは、本単元の導入教材「物語の中の少女」の教材特
 性を精細な教材研究によって見抜き、それを最大限に生かすた
 めに、「書く」活動を中核に置いた古典指導を行った。そのこ
 とにより、学習者は、古典と現在の自分との繋がりを実感し、

古典への偏見を破り、古典にひきよせられた。

三 単元「古典へのとびら」の学習の実際

1 単元設定の理由

単元設定の理由は、六項目にわたって述べられている⁽⁶⁾。それらを分類すると次の三つにまとめられる。①古典は現代文化の源をなし、近代文学の伝統的背景を形造っている。その古典と現代社会を生き抜かなければならない学習者とを結ぶ学習と、古典の正しい受容と理解の学習が必要である。②古典へと読書範囲を広げさせたい。③学習者の学力からも、関西への修学旅行を控えているという時期からも、古典に触れさせる良い時期である。

大村はまは、古典学習を知識や教養を身に付けるためのものとは考えていない。古典学習は、学習者が現代社会を生き抜くために必要なものと大村はまは捉えている。

2 単元の目標

価値目標は、「1. 古典文学を身近なものとして味わわせ、古典に深く親しみを持たせること。2. 古典文学を読むことの意義を体験によって味わわせ、今の文学も古典を受けついでものである⁽⁷⁾。これからの文学も古典からの発展であることを考えさせる。」である。1の「身近なものとして味わわせる」ことなしには、「古典に深く親しみをもたせること」はできない。さらに、2の目標をかなえることもできない。単元の導入としては、まず、「身近

なものとして味わわせる」が目あてとされるものである。

技能目標は、「聞くこと話すこと、読むこと、書くこと」の項目ごとに定められている。「書くこと」の目標は、「はつきりした根拠に基づいて、事実や意見を正確に書く態度を伸ばすこと。」であった。さらに、学習活動を通して「ことばの使い分けについて考え、相手と時と場所に応じて適切に理解し、表現するくふうをすること。」の指導に力を入れるとしている。これは、言語感覚を磨くと同時に、理解と表現の質をも規定するものであり、この指導が「物語の中の少女」学習の中でも随所に見られ、古典教材と学習者の交わりを生み出し深める鍵となるものであったと筆者は考えている。以下に考察し明らかにしていきたい。

3 資料

本単元では、大村はまも編集に参加した、西尾実編著（筑摩書房昭和三十一年版）の教科書「中学国語三上」が資料として用いられた。単元は、四つの代表的古典教材（更級日記、平家物語、徒然草、枕草子）から成っている。教科書以外に準備され資料は、生徒の作文、原文のプリント（更級日記の一部、扇の的一部）、ワークブック（教科書に付属のもの）であった。

4 指導計画

大村はまは教科書に掲載された教材順に学習を進め、教材ごとに指導のめあてを定めそれに応じた学習活動を組み合わせている。表1は、全集の指導計画を参考に筆者が簡略にまとめたものである。

表1 「古典へのとびら」の概要 * (時間) は指導計画時間数

教材	指導のねらい	主な学習活動(傍線は筆者)
導入 (一時間) 物語の中の少女(更級)創作 (四時間)	古典への偏見を破り、ぐっと古典にひきよせる	古典学習への期待を書き、話し合う。図書委員から図書館にある古典の本についての紹介を聞く。 短作文を書く。「物語の中の少女」を読む。今まで「古典」に対して持っていた考えを比べてみる。発表する。手引きにより、まとめとして「古典と私たち」を書く。
扇的(平家)現代語訳(三時間) 木のぼり(徒然草)原文と現代語訳(五時間)	古典を自分たちの身の内のものと感じさせる これまで進めてきた心持ちをここでさらにもりあげる	調査をする。グループで読む。「扇的」を読んで新しく知った内容を箇条書きにする。調査結果の集計とグループでの話し合い。発表。 手引きにより読む。「木のぼり」に似た話を思い出す。グループで話し合う。「馬乗り」から学んだことを標語にする。「えのきの僧正」の結びを書き発表しあう。
うつくしきもの(枕草子)原文と注釈	別の面からもう一度古典と自分達との間に通じるものが多いこと	共鳴するところを考えて文章にまとめ。徒然草と枕草子からことば(古今異義語、古今同義語、使われなくなったもの)を拾う。

(二時間)	とを味わい返す	
まとめ(二時間)	<ul style="list-style-type: none"> 古典文学を味わわせ古典に親しみをもたせる。 古典文学を読む B 古典はむずかしいだろう、いやだという意見に対して。 C 古典の学習から学びえたこと、興味をもったこと。	三つの題から一つを選んで「古典学習の結び」の作文を書く。 A 中学生には古典の学習は、わり

導入、四教材、まとめの学習の全てで、「書く」活動が行われている。導入では発表のための書く。更級では短作文と、手引きによるまとめの作文を書く。平家では箇条書きと、「書く」ものの種類も学習によって異なり、変化をもたせて、学習者を飽きさせない工夫がなされている。

その他の活動としては、導入の「図書委員から図書館にある古典の本についての紹介を聞く」が注目される。全集本単元の最終頁には、学習後に図書委員が自発的に掲示板に貼り出した「古典紹介」の文章が置かれている。本単元の学びが、主体的な古典の学び手を育てた証左とも考えられよう。

5 「物語の中の少女」(更級日記)の教材特性

本単元最初の教材「物語の中の少女」の出典は堀辰雄の「姥捨」である。大村はまは、全集の教材研究で次のように記す。

生徒は、多く、古典を近づきにくいもの、教訓の書かれたもの、

または、武勇物語と思っている。「物語の中の少女」は、その気持ちをやわらげ、こんなのも古典かというような気持ちにさせるであろう。そして、古典の認識を改めさせ、古典に近づかせると思う。

望月敬幸は、教材の選択理由を「細かい描写、心にしみとおつてくるような静かなあわれな調子に気づかせるためには、美しく繊細な描写、澄んだ作者の心も必要になってこよう。そうしたことを考えたとき、ただの現代語訳を学習者にぶつけるよりは、堀辰雄の文章を採りあげた方がよい」と氏（大村はま）筆者補記）は考えたのではなからうか。」と述べ、堀辰雄の文章と『日本古典文学全集更級日記』（小学館昭和四十六年）の現代語訳を比較している。それには、「甲文（堀辰雄の文章）は、乙文（現代語訳）に比べて、①表現がやさしく美しい、②ことばがわかりやすい、③文章内容がわかりやすい」と三観点による具体例があげられている。①の観点から一例のみ引用すると、「（甲）驚いて見ると、かわいい子ねこが、どこから来たのか、少女のかたわらに来ていた。（乙）はつとして、よく見るといかにも可愛げな猫がそこにいる。」がある。確かに、乙の「そこにいる」と甲の「少女のかたわらに来ていた」では、想像される情景の画質までが変わるように筆者は感じた。なぜ、西尾実や大村はまが、古典単元の導入教材として、「物語の中の少女」を配したのが、この一点の違いからも見えてくる。

筆者は、望月氏の論を受けて、この文体・表現を最大限に生か

す学習活動が大村はまにより準備されたことを以下で論じる。

四 教材特性を生かす学習活動の実際

1 学習活動の実際

大村はまは、教科書教材「物語の中の少女」（堀辰雄）の教材研究によって教材の特性を見極め、それを最大限に生かした学習指導を行っている。例えば次のようなものである。^(1,2)

【学習活動 a】（第一時）単元「古典に親しむ」への期待を話しあう。○十分ほど、書いて用意する時間をとった。○「古典に親しむ」へのところを扱って「古典に親しむ」に寄せるといふことばを指導した。（傍線は全集に拠る。）

【学習活動 b】（第一時）次の中から三―四題選んで書く。○私の好きなこと ○ほしいもの ○こわかったこと ○悲しかったこと ○美しいと思つた景色 ○ある日の空想（第五時に資料として使用する。） ○時間三十分

【学習活動 c】（第二時）文章「私の今まで描いていた古典のイメージに照らして」を書く。○はじめ、「めいめい、今まで古典というものに対してもつていた考えに比べて、今の考えを書いてみよう」と話し、「私の今まで古典に対してもつていた考えに比べて」という題にまとめた。それからこういう場合の考えを表わすことばとして「イメージ」を与え、それを中心に、「もつていた」を「描いていた」に、「比べて」を「照らして」と考えさ

せた。○書きだしのヒントを与えた生徒が多い。書きだしのヒントとして、「私は今まで古典というものをこうこういうものと考えていた。いま、この『物語の中の少女』を読んで、今までの考えと比べてみると……」というふうに書くときよいと話した。○書き時間十五分

【学習活動d】(第四時)「物語の中の少女」を左のような点について考えながら味わう。①題 ②構想 ③この少女はどんな少女か ④物語風な空想、少女らしい空想はどこに書かれているか。⑤細かい描写、美しい絵のような場面はどこに書かれているか。

【学習活動e】(第五時)「物語の中の少女」の一節を原文で読む。○プリントを与え、指導者が読む。非常に興味をもつらしく、教室にいつもとちがったしんとした空気が流れた。

【学習活動f】(第五時)第四時に考えたことをまとめて文章に書く。教科書と、更級日記の原文と第一時の次の予備の時間に書いた作文とおもな資料として書く。自由な形、構想で書くが、思いつかない場合は、次のてびきの始めのような順序で書く。

(てびきプリント)

題「……………」

内容に合った題をつける。

(1)ことばのかべがとれると、古典は自分たちに直接つながってくる。

(2)たとえば、「物語の中の少女」

原文から一節をとりあげ、そ

の一節でも……………。

(3)また、この少女は、自分の生活を物語風に考える空想的な少女であると、みんなで考えたが、

そういうことは、この間書いた、私たちの作文にもよく出ている。

(4)物語風の空想は……に出ているが、クラスの作文には、こんなのがあった。……

(5)また、少女らしい空想は……書かれているが、クラスの作文にはこんなのがあった。……

(6)こんなふうに見てみると……

作文資料から

①すぐ大きく、りっぱな屋敷がある。自分はその家の主人である。外へ出かける時は、自動車が迎えにくる。使っている人がみんな並んであいさつする。そのあいさつに答えながら自動車に乗る。みんな「行ってらっしゃいませ」とあいさつする。自動車は音もなくすうっと出ていく……ある日の空想である。(②③④は省略)

《考察》

学習活動a cは、「書く」活動の前に、「ことばの指導」が行

の部分にあたる「物語の中の少女」の一節と比べて、(1)の例とする。

「物語の中の少女」の、物語風の空想の書かれているところを挙げ、あとに出ている作文から適当なものを取りあげ

このように書きはじめて、自分の考えを書く。

われている。「ことばの使い分け」について考え、「書く」時にも、ありあわせの表現ではなく自分の言い表したいことにぴったりの表現をするように意識を向けさせるものでもある。

学習活動 b では、六つの題から三つ四題を選ばせて短作文を書かせている。「かなしかったこと」や「ある日の空想」など、学習活動 f に繋がるものである。

学習活動 d は、「物語の中の少女」の表現に着目しながら教材の読みを深めていくものである。学習活動 a と e は、一つ一つが独立したものでありながら、学習活動 f の準備学習ともなっている。学習者個人個人が、自由に書いた作文と、読み取ったものを学習記録に書き写したものが、f の活動でまとめられ、ここで、学習者は、古典を身近なものとして味わい、それを言語化することになる。

2 学習者は「物語の中の少女」とどのように出会ったか

文海中学校三年 C 組の学習者 F N さんの学習記録¹³を考察対象とし、学習者が教材を媒介として古典世界と出会い、それを言語化し、何が実現されたのかを明らかにする。(丸字、傍線は筆者)

① (一時間目) 私は昔のたとえば平安時代などの事について大いに興味をもっています。(中略) 古典のそういう勉強をしているとその世の姿がありありと頭に浮かび上ってくるようなのです。昔の世の静かき、美しき、またはげしきが私は大好きです。今のような洋服よりきれいな着物をきてみたい。

② (二時間目) 「物語の中の少女」はちょうど①私たちがぐらいの少女のことが描かれているのでたいへん興味をもちおもしろいなと思いました。ほんとうに古典の文学はいい。②昔は髪の毛の長いのがほこりだったようですが今は案外反対。(後略)

③ (三時間目) (私の今まで抱いていたイメージに照らして)

③ 私は今まで古典というものはただ昔のことば使いでむずかしくかいてあり、それを鑑賞したり訳したりするものだと思ってきました。ところが「物語の中の少女」を読んで④こんなものも古典に入るのかとびっくりしました。そしてこんなおもしろいものもあるのならこれからどしどし読もうと思う。(後略)

④ (感想) 「物語の中の少女」などは⑤古いことばを使用しないで私たちの読みいようにしてありますが主人公の少女の気持ちと私たち現代の少女の気持ちが直結するように思いました。(後略)

⑤ (四時間目) (作文) 「昔の人」「今の人」

⑥ ことばのかべがとれると、古典は自分たちに直接につながっている。／たとえば、「物語の中の少女」の「一説」でも原文の方で、「この猫を北面にのみあらせて呼ばねば、かしがましくなきのしれども、なほさるにてこそはと思ひてあるに、…」というところがあるので、これはどんなことをいっているのかけんとうもつきません。それで教科書にでている訳したほうをみるとこういう意味なのです。(中略)。このようにことばのかべがとれるとなんとよくわかり、おもしろいものなのだろうかと思った。⑦そ

して、たしかに物語の主人公の少女と私たちの気持がつながっているではありませんか。(中略) / **また⑧少女らしい空想は、**今まだ自分は幼くて、容姿もよくはないが、もつとおとなになったら髪もずつと長くなり、夕顔、浮舟のようにきれいになれるかもしれないなどと**書かれているが、クラスの作文にはこんなものがあった。**①つは花が一面に咲きみだれているところで小鳥たちと楽しく遊んでいるというふうには、⑨自然に対してのあこがれを空想化したもの。②つ目は、昔の十二単衣のきものを着、美しい花園を散歩するといったようなほんとうに⑩少女だけが空想する所があり、⑪やっぱり昔の少女も現代の少女も考えが一致しているところがあるのだなと思つてなんだかそういう事がわかると古典についてますます興味がわいてくるようです。／このように古典と私たちはなんだかによって結びれているのだと思ひました。

⑫ことばのかべがとれることによつて、私たちの考えていること、また物語の少女などの考えていることがだいたい同じだということとはつきりしてきた。「物語の中の少女」のほかの古典をもつとよみ、直接私たちとつながっていることなどをいろいろさがしだして考えてみたいと思ひました。(太字は大村はまの手引き)

学習者FNさんは、学習前から古典に興味をもっている。その興味が、①の理由からさらに深まり、②の現代との違いの気づきが生まれている。③では、古典や古典学習への偏見が自分のことばで具体的に記されている。それに対して④はまだ大雑把で抽象的な表現にとどまっている。しかし、⑤では「びっくり」「おも

しろい」を、現代のことばで書かれていることによつて、主人公の気持と現代の私たちの気持が直結するように思ったと学習者自身のことばでより正確に捉えている。これが、⑥の大村はまの手引きのことばにより、学習者に明確に自覚された。そして、ことばのかべがどういったものであるのかが、たとえば以下の原文と教科書との対照で具体的に認識されている。⑦では、「たしかにありませんか。」と、自分と古典との繋がりが意識化されたことが強調されている。⑧少女らしい空想では、クラス作文を、⑨自然に対してのあこがれを空想化したものと⑩少女だけが空想するものに分類して引用している。この分析的で精緻な読みが、⑪⑫の表現に繋がっている。

以上の学習記録から、前項で示したように、学習活動a～fへと学習が進み、学びや感想を言語化することを重ねるにしたがつて、学習者の教材の読みが深まり、質の高い読解が、さらに、細やかな表現を生み出し、言語化することによつて、認識が深められているといえよう。

五 結論と今後の課題

大村はまは、教材特性を精細な教材分析、教材研究により見抜き、学習者の現在の生活と教材を結ぶ手立てとして、「書く」活動を行わせた。大村はまは、学習者に古典の学習とは思わずに自分の空想や心情を自由に書かせ、堀辰雄の文章を仲立ちとして、

古典文学(原文の一部を含む)に学習者ひとりひとりを出会わせ、身近なものとして味わわせることに成功している。「書く」活動が万能なのではなく、教材と学習者の実態の両方を見る指導者の眼が、「書く」学習活動を選択し、学習者を古典にひきよせた。

古典学習導入でリライト教材と原文をどう組み合わせればよいのかについての具体的な示唆が得られた。手引きを用いて、「古典を引用した文章を書く」ことにより、読解力と表現力が高められる可能性も見えてきた。学びの過程と成果を言語化することは、古典学習に限らず、教材と学習者の関係性を意識化することに機能するといえよう。

本単元が実践された昭和三十四年は、大村はまが作文指導に力をいれた年度である。古典学習が年間カリキュラムの中にどのよう位置づけられ、「ことばの力」に培うものであったのかを明らかにすることは、今後の課題として残されている。

注

- (1) 調査の対象としたのは、『月刊国語教育』(平成二十一年一月号)十二月号東京法令)、『教育科学国語教育』(平成二十一年一月号)十二月号、平成二十一年五月、八月臨時増刊号明治図書)である。

- (2) PISAにおける「読解力」は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義されている。国立教育政策研究所編『生きるた

めの知識と技能3』平成二十一年ぎょうせい(一七二頁)
(3) 『中学校学習指導要領解説国語編』平成二十一年東洋館出版(一一五頁)

- (4) 西尾実『西尾実国語教育全集第六卷 国語教育理論集説(二)』昭和五十年教育出版(一〇〇頁)

- (5) 大村はま『大村はま国語教室第三卷 古典に親しませる学習指導』昭和五十八年筑摩書房(九一頁)一三五頁)

- (6) (5)に同じ(九一頁)九二頁)

- (7) (5)に同じ(九二頁)九三頁)

- (8) 昭和三十一年度版西尾実編『国語三上』(復刻「中学国語・学習指導の研究全十八冊」平成四年(三三頁)五四頁)

- (9) (5)に同じ(九八頁)一〇一頁)

- (10) (5)に同じ(九四頁)九五頁)から一部を抜粋した。

- (11) 望月敬幸『中学校における古典指導の研究』(修士論文平成五年鳴門教育大学院)(二一九頁)二二八頁)

- (12) (5)に同じ(一〇二頁)一一三頁)から一部を抜粋した。

- (13) 学習記録番号(3431C59) 文海中学校三年C組(鳴門教育大学図書館大村はま文庫所蔵)

【附記】本稿は、平成二十一年度解読学会全国大会(平成二十一年八月二十六日)において、口頭発表した際の草稿の一部を加筆・修正したものである。

(ばんどう・ともこ)兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程)